

特別支援学級におけるファシリテーションの考え方を活かした授業づくり

ー 生活単元学習における主体的な学びを引き出す工夫 ー

高木 由希・ 村上 理絵*

1. はじめに

広島大学附属東雲中学校（以下、本校と略記）の特別支援学級（知的障害）では、知的障害教育の教育課程を編成している。特別支援学級全体や学年別など、学習形態をその学習の特徴や生徒の実態に応じて変えながら、教科別の指導と教科・領域を合わせた指導の教育実践に取り組んでいる。

知的障害のある児童生徒の学習上の特性の一つに、「成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないこと」が挙げられ、こうした特性を踏まえて「児童生徒へのかかわり方の一貫性や継続性の確保、在籍する児童生徒に関する周囲の理解などの環境条件も整え、知的障害のある児童生徒の学習活動への主体的な参加や経験の拡大を促していくことも大切」とされている（文部科学省, 2018）。特別支援学級 2 年生（以下、本学級と略記）では、1 年時から生活単元学習を中心に通常学級の生徒や教員と関わる学習活動を設定し、生徒の主体的な姿を引き出す教育実践に取り組んできた。一方で、知的障害の程度に実態差のある学級集団において個人の学びと集団での学びを両立させながら、主体的な参加を促す授業展開に課題を感じるがあった。

中央教育審議会（2022）は、教員に求められる資質能力の再整理をし、具体的な資質能力の一つにファシリテーション能力を挙げている。ファシリテーションとは、「集団による知的相互作用を促進する働き」であり、その役割を担う人のことをファシリテーターと呼ぶ（堀, 2018）。中野（2021）は、ファシリテーションの「促進する」という意味について、教育の世界では「教員が何かを直接教えたり指示したりするのではなく、学習者本人が自ら主体的に学ぶ、あるいは学習者同士がヨコの相互関係の中で自分たちで学んでいくことを促すこと」だと述べている。これは、前述した知的障害のある児童生徒への教育において大切にされていることと同じであり、知的障害のある児童生徒への教育に携わる教師がファシリテーターとなることが大切だと考えられる。また、岩瀬・ちよん（2011）が、ファシリテーターとなった教員が子どもの課題解決力を高め、互いに学び合うチームワークを育むとして、授業や学級経営にファシリテーション技術が有効だと述べていることから、様々な実態の児童生徒が在籍する特別支援学級の学級経営や授業づくりにおいてもファシリテーションの考え方を活かすことが、よりよい教育実践につながる事が期待できる。

特別支援教育分野におけるファシリテーションは、ケース会議などの会議運営などの報告が多くみられるが、知的障害教育における授業づくりでファシリテーションに焦点を当てた報告は少ない。そこで、本稿では、ファシリテーションの考え方を活かした生活単元学習の授業づくりの実践を報告する。

2. 研究の目的と方法

目的：ファシリテーションの考え方を活かした生活単元学習の授業づくりとその効果について検討する。

方法：①ファシリテーションの考え方を活かした授業の構想

②生活単元学習の実施

③授業記録や授業時に使用したワークシートの記述から、生徒の学びについて分析する。

④教員のファシリテーターとしての役割の効果について検討する。

対象：第 2 学年特別支援学級 男子生徒 2 名（生徒 A, B）、女子生徒 3 名（生徒 C, D, E）

* 広島大学大学院人間社会科学研究所

Yuki TAKAGI, Rie MURAKAMI

Lesson planning with Facilitation in junior high school special support classes: Initiation to promote proactive learning in the life unit learning (Seikatsu-Tangen-Gakusyu)

3. ファシリテーション技術を生かした授業づくり

本稿では、授業づくりに用いるファシリテーションの考え方を、ちょん(2010)が開発したホワイトボード・ミーティング®の手法を参考にした。ホワイトボード・ミーティング®とは、ホワイトボードを用いて、参加者の意見やアイデアを集める効率的・効果的な会議の進め方のことである。

ホワイトボード・ミーティング®では、話し合いに【発散】→【収束】→【活用】のプロセスを作っている。【発散】とは、意見をどんどん出してオープン・クエスチョンで深める情報共有のことであり、【収束】は軸を決めて出た意見の方向付けをすること、【活用】は具体的な行動や活動計画を決定することである。生活単元学習の授業づくりにおいて、生徒が自分の考えを深めたり意見を共有したりする活動でこのプロセスを用いることができるのではないかと考えた。生徒が学習活動の過程において物事を決める場面などでは、生徒の思考を遮ることなく自然な流れにしていくことが必要である。【発散】には、話し手の意見やアイデアを書き出しながら共有することで、話し手に気づきを促していく特徴があることから、生徒が思考を深める過程を【発散】、【収束】、【活用】のプロセスをもって整理することで、個人の学びと集団での学びを両立できるのではないかと考えた。

また、ホワイトボード・ミーティング®では、表1に示すようにファシリテーションを構成する6つ技術(ちょん・岩瀬, 2010・2013)があり、力点の置き方で授業者の説明が中心の授業か、学習者の主体的・対話的な活動が中心の授業かを選択できるとされる(ちょん, 2021)。

表1 ホワイトボード・ミーティング®におけるファシリテーションの6つの技術

-
- 1 インストラクション(指示・説明・価値)
 - 2 クエスチョン(質問・問い立て)
 - 3 アセスメント(評価・分析・翻訳)
 - 4 グラフィック&ソニフィケーション(可視化&可聴化)
 - 5 フォーメーション(隊形・場面)
 - 6 プログラムデザイン(設計)
-

生活単元学習とは、「児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習するもの」(文部科学省, 2018)であり、生徒にとっての生活と学びが乖離しては、生徒の主体的な学びの姿を引き出すことは難しい。また、生活単元学習の指導計画の作成に当たって考慮する点には「(ウ) 単元は、児童生徒が目標をもち、見通しをもって、単元の活動に積極的に取り組むものであり、目標意識や課題意識を育てる活動をも含んだものであること」(文部科学省, 2018)が示されている。

これらのことを踏まえると、単元の導入時や授業開始時に、生徒の興味関心を高めることができるような発問は「1 インストラクション」や「2 クエスチョン(質問・問い立て)」として整理が可能である。加えて、授業づくりの過程で板書やワークシートの内容、活用の仕方、意見の交流方法を考えることは「4 グラフィック&ソニフィケーション(可視化&可聴化)」, 授業中に学習活動に取り組む生徒の様子を適宜みとりながら次の問いを考えていくことは「3 アセスメント(評価・分析・翻訳)」としても整理が可能であると考えられ、生活単元学習の授業づくりにおいてファシリテーションの6つの技術が活用できると考えた。

4. 授業実践

(1) 生活単元学習「職場体験(事前学習)」

校外で実施する3日間の職場体験の事前学習において、職場体験での個人目標を考える活動の過程で【発散】【収束】【活用】のプロセスを用いて授業を展開することとした。

はじめに、職場体験の内容やスケジュールを確認し、その後、職場体験先で支援者に評価してもらう10の項目「①指示の聞き方」「②挨拶と返事」「③意欲(がんばりの気持ち)」「④変更への対応」「⑤身だしなみ」「⑥用具の使い方」「⑦言葉遣い」「⑧作業の正確さ・丁寧さ」「⑨作業のスピード」「⑩作業の継続」について、ワークシートを用いて行動の具体を考えることとした。大まかな学習の展開を表2に示す。

表 2 学習の展開

- 1 職場体験の内容の確認
- 2 がんばりポイント (行動の具体) を考える
 - (1) 自分で行動の具体を考え, ワークシートに書きだす (①~⑤)
 - (2) 学級全体で考えを交流する
 - (3) 自分で行動の具体を考え, ワークシートに書きだす (⑥~⑦)
 - (4) 学級全体で考えを交流する
- 4 自分の目標を決める (選ぶ)

学習活動を考えるにあたり,【発散】は,各評価項目の行動の具体を個人で考えてワークシートに書き出す活動と「考えたことを学級全体で共有する活動」の2つで設定し,【収束】と【活用】は,「共有した内容をもとに,個人目標決めたり選んだりしてその理由を書く活動」とした。なお,【発散】については,行動の具体を考える項目の多さを考慮して,2回に分けることとした。授業全体の流れを図1に示す。

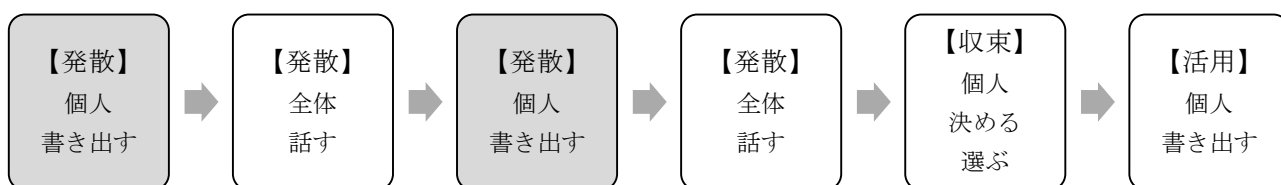


図 1 授業全体の流れ

自分で行動の具体を考え,ワークシートに書きだす活動では,生徒Bが,最初は何を考え書いていいのか迷っている様子であったが,「指示の聞き方,というと?」などと問いかけを繰り返し,枠に点を書き足して考えを書く個数を示したことで,自分なりの考えを書き込んでいた(図2)。「①指示の聞き方」の「たいそうずわりをする」や「③がんばりの気持ち」の「人はさわらない」などは,普段の学校生活で生徒B自身が気を付けていることである。ワークシートに書き示されていることと教師の問いかけをヒントに,行動の具体を自分の生活とつなげながら思考を深めている様子うかがえた。

生徒Cは,普段の学校生活において,教師の問いかけに対する反応が早く積極的である一方で,反射的に反応してしまうために質問の意図とは異なることを答えてしまうことがある。しかし,書くという作業を通じた【発散】により,ワークシートへの書き込みの時間は,じっくりと行動の具体を考える様子が見られた。「⑩作業を続けること」では,「休憩しながらする」という記入をしており,「休憩するってどんな感じ?」と尋ねると,自分が休憩する時に言う言葉を答えたため,記録をした(図3)。

(1) 職場体験のがんばりポイント

① 指示の聞き方	しずかに聞く たいそうずわりをする
② あいさつと返事	はいようございますと言う はいと言う
③ がんばりの気持ち	人に聞く 人はさわらない
④ 変更があった時	変更があっても ぐくにんは1回だけ
⑤ 身だしなみ	お仕事をする しつもんしてモリ川ごまかす言う
⑥ 道具の使い方	きれいに使う 片付けをする
⑦ 言葉遣い	ていねいにしつもんをする ですとますをしやべります
⑧ 作業の正確さ・丁寧さ	はしこまごやります 集中していねいに作業をする
⑨ 作業のスピード	ゆっくりやります 歩いて行く
⑩ 作業を続けること	つかれてもお仕事をする お仕事をやる

図 2 生徒Bのワークシート

(1) 職場体験のがんばりポイント

① 指示の聞き方	静かに最後まで聞く。
② あいさつと返事	はざり返事をするあいさつをしな
③ がんばりの気持ち	作業に集中する時。
④ 変更があった時	大学の先生の指示を良く聞く。
⑤ 身だしなみ	ゆかをきつけないようにする。
⑥ 道具の使い方	雑音にあつかわない。
⑦ 言葉遣い	敬語を言います。例えばはあがり ないとは、言わない。ちがひが 中央図書館で本の整理の時 に本のタイトルを見えるように 並べます。
⑧ 作業の正確さ・丁寧さ	つかなくてもあきらめない。
⑨ 作業のスピード	
⑩ 作業を続けること	休憩しながらする。 「お疲れです。お疲れです。お疲れです。」

図 3 生徒Cのワークシート

個々でワークシートへの記入に取り組んだ後、「考えたことを学級全体で共有する活動」では、生徒の考えをそのまま黒板に書き出した(図4)。同じ項目でも、それぞれの生徒が思い描く行動の具体的なイメージは様々であり、交流していく中で「確かに!」「一緒に!」という共感のつぶやきや「思いついた!」と仲間の発言をヒントに思考を深める様子も見られた。

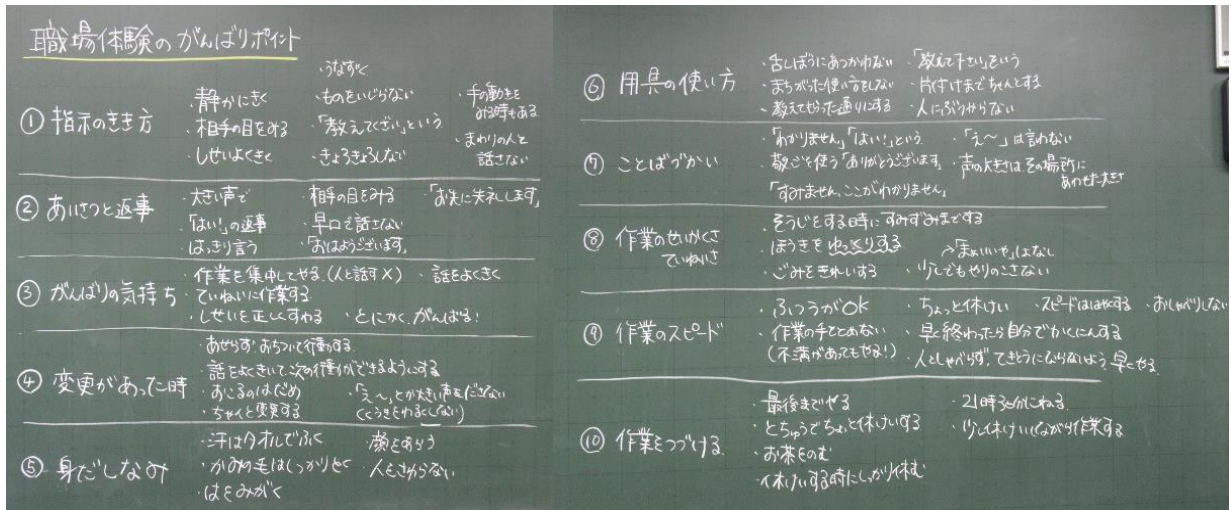


図4 生徒の意見交流の板書記録

【収束】【活用】として設定した「共有した内容をもとに、個人目標を決めたり選んだりしてその理由を書く活動」では、自分が書き出したワークシートの言葉や板書を見返して、自分の目標を考えた(図5)。全体での共有を経たことで、自分で考えた行動の具体に自信を持ち、さらなる具体や普段の自分の課題を捉えなおして目標を設定することができていた。

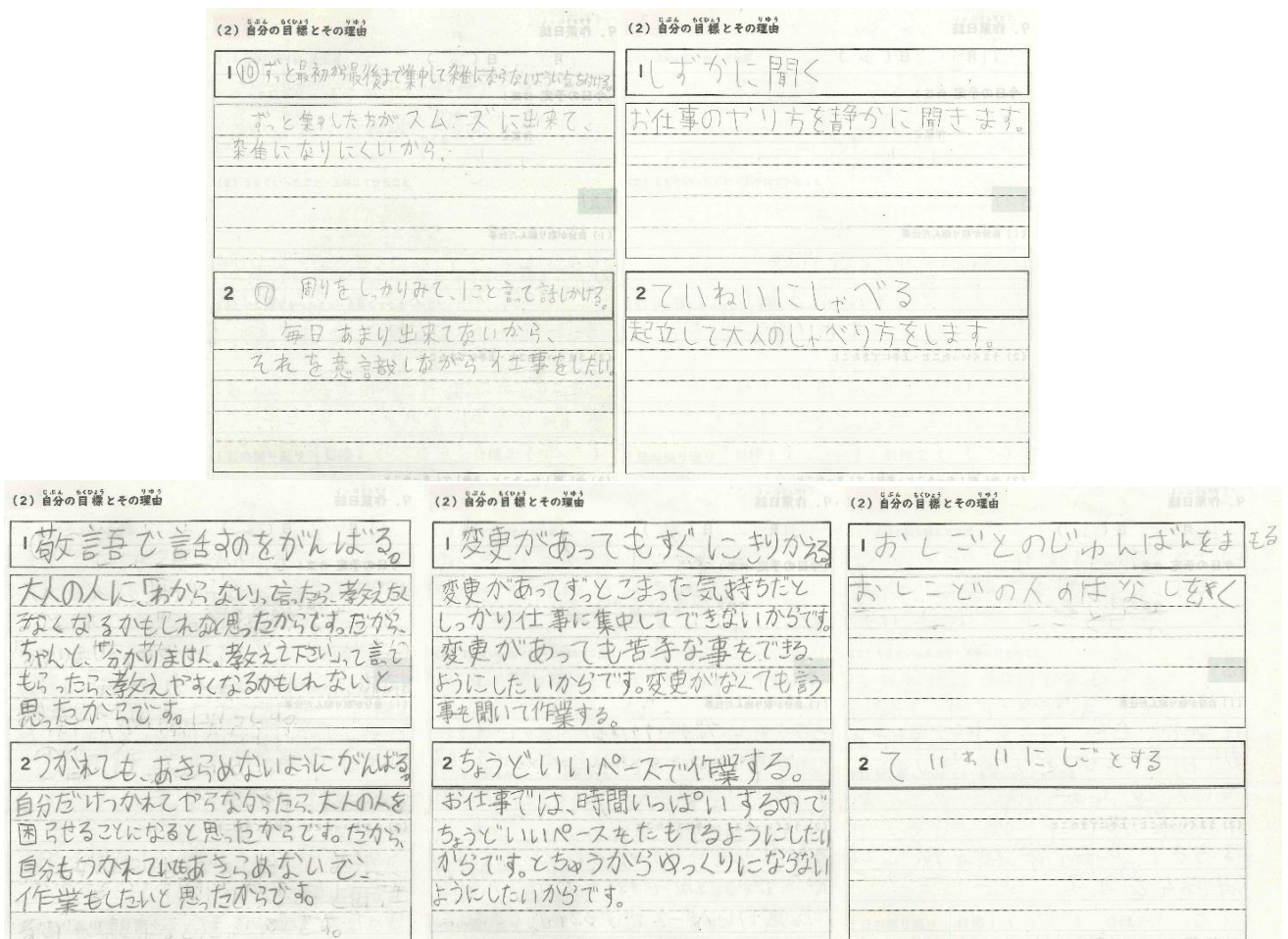


図5 生徒それぞれの個人目標とその理由

5. 成果と課題

本稿では、ファシリテーションの考え方を活かした生活単元学習の授業づくりについて報告した。授業全体で、生徒が思考を深めていく過程を【発散】【収束】【活用】の3つの軸で捉えたことにより、職場体験学習における個人目標の設定という個人の学習活動となりがちな活動を、学級集団を活かして展開することができたと考える。特に、本実践では【発散】の方法を「個人」と「全体」、「書き出す」と「話す」という異なる2つの方法で構成し、最終的に【収束】と【活用】で「個人」に戻す展開とした。こうした「個人」と「全体」、「書き出す」と「話す」という方法を行き来しながら繰り返すことにより、生徒が何を考えればよいかを理解したり自分の考えに自信をもったりすることにつながり、個の学びと集団の学びを両立させることができたと考える。同時に、生徒が思考する過程において、生徒の実態に応じた問いかけをすることにより、生徒の書き言葉に現れない思いやイメージも把握することができた。このことは、前述したファシリテーションの6つの技術である「2 クエスチョン（質問・問い立て）」と「3 アセスメント（評価・分析・翻訳）」が活用されたものと説明できる。

名古屋(2022)は、子どもが生き生きと活躍する各教科等を合わせた指導の在り方について、「子どもと教師が、思いを共にし、活動を共にし、本気・本物の生活に取り組むこと」だとしている。子どもと教師が思いや活動を共にするには、そのための手立てが必要となる。ファシリテーションの考え方は、授業づくりの過程において生徒の思考の流れや個の学びと集団の学びのバランスを捉えていく上で役立つと考えられることから、手立ての一つとなるのではないかと考えた。また、「ファシリテーターの視点は、常に個人と集団に向けられており、個別最適化と共同的な学びを有機的に組み合わせながら授業や学級経営が進められる(ちよん, 2021)」とされることから、知的障害教育に携わる教師がファシリテーターとなり、様々なファシリテーションの考え方を活用して個と集団の学びを両立させた授業づくりに取り組むことで、知的障害のある生徒の主体的な参加や経験の拡大を促していく教育実践が可能となると考える。

一方で、知的障害のある人たちのことばについては、「日常会話は問題なくても、抽象度の高いことや物事の仕組みなどを理解するのに時間のかかる人が多くいる」(打波, 2018)とされていることから、その引き出し方に難しさを感じることもある。本実践においても、本人の発する言葉と本人が伝えたいことのニュアンスが異なる場合もあり、表面的な言葉のやり取りを取り上げるだけでは十分でないことも考えられた。生徒の実態を踏まえて、前述したファシリテーションの6つの技術を活用していくことが必要である。また、本実践は一事例であり、知的障害教育におけるファシリテーションの考え方を活かした授業づくりの在り方については検討が必要であると考え。今後も引き続き、実践研究に取り組んでいきたい。

【引用・参考文献】

- 文部科学省, 特別支援学校学習指導要領解説 各教科等編(小学部・中学部), 2018.
- 中央教育審議会, 「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～(答申), 2022.
- 堀公俊, 実践ファシリテーション技法, 経団連出版, 2018.
- 中野民夫, 教師に必要なファシリテーション力とは, 教育研究, 1432, 2021.
- 岩瀬直樹・ちよんせいこ, よくわかる学級ファシリテーション①かかわりスキル編, 解放出版社, 2011
- ちよんせいこ, 元気になる会議, 解放出版社, 2010.
- 岩瀬直樹・ちよんせいこ, よくわかる学級ファシリテーション③授業編, 解放出版社, 2013.
- ちよんせいこ, 「令和の日本型学校教育」に求められる教員の資質・能力としてのファシリテーション, 教育研究, 1432, 2021.
- 名古屋恒彦, 確かな力が育つ知的障害教育「各教科等を合わせた指導」Q&A, 東洋館出版社, 2022.
- 打波文子, 知的障害のある人たちと「ことば」ー「わかりやすさ」と情報保障・合理的配慮, 生活書院, 2018.